

# MRAと私

第一集



## はじめに

フランク・ブックマン博士の生誕百年を記念して「M R Aと私」と題する文集を発刊することになり各位にご執筆をお願いしたところ七編が集まりましたので、まずそれを第一集として刊行することにいたしました。

この文集は百人を目標にし、今後も引続き第二集、第三集を第一集と同様、ブックマン博士について、またM R Aについての感想や経験を集録していきたいと思ひます。最後には一冊にまとめて、M R Aを知りたいと思う人たちへの道しるべとすると共に、そのまま日本におけるM R Aの記録としてとどめたいと思ひます。

昭和五十三年九月

国際M R A日本協会

「M R Aと私」編集部

# M R A と私

井上芳佐

馬來半島の北端で終戦を迎え、シンガポール周辺で抑留生活（内五ヶ月は英軍刑務所、その後の約一年は志願して残留）を体験し、昭和二十年十二月末日佐世保に上陸した時、私が持っていた決意は次の二つでありました。

- ① 敗戦の原因は開戦の原因の中に在った。もう断じて戦争はしない。
- ② これからは詔書にお論しの『万世太平』の一事の為に生きる。

○

帰郷した私は直ちに農地開放で残った五反五畝に精魂を打ち込み、土百姓になり切って「万世太平」への道を捜し求めました。

しかし、その端緒さえもつかめない内に母と妻とに、さきだたれたので昭和三十年春飄然上京しました。そして先輩、知友を訪ねました。神田の古本屋を漁りましたが望みのものは得ら

れず、途方に暮れておる時、偶然、M R A 劇「光の矢」の広告を見て飛び上り、連日観劇、私の熱望しておるものを与えられたのは全く天の恵みでした。

○  
その後麻布のM R A ハウス、小田原のアジアセンターでM R A の先達の懇切なご指導を仰ぎ、次いでスイスのコーの世界大会に出席、みっちり訓練を受けました。ブックマン博士にお目にかかったのもその時でした。

その後、劇「タイガー」の一団に加えて頂き、満二カ年世界十三カ国を歴訪した事は相馬不二子さんの著書にある通りです。

帰国後、更に同志の一団と共に劇とフィルムとを持って北は北海道から本州、四国、九州の各地を歴訪し、貴重な体験を得ました。

○  
国外、国内での経験を通じて、私は次の事を体得しました。

一、劇、講演、対談等に依り、新しい人生を求める人々に感銘を与える事は必ずしも困難ではありませんが、一時的（テンポラリー）チェンジでなく終身（パーマナント）チェンジを遂げ、終生世界改造の為献身せしめる事は難事中の至難事であります。

二、真のM R A人たらしとする者は、使命觀に徹し献身の決意を持つべきです。

(主のまなざしわが上にあり、われ従わんと南阿へ単身赴任した時のアルバート・シユバイツアー博士のそれです。)

○

知徳共に優れられる諸賢が進んで社会の各領域で御活躍下さる事に衷心から敬意を表しますが、私はその柄でないので土に埋もりながら次の二つの事に生き甲斐を感じ精進しつつあります。

### 第一 煙仲間

一般国民の生活の根をうるおす地下水的役割を果たそうとするものであります。

それは組織ではなく、一人ひとりが歩きまわる良心となり、恰も煙の微粒子の如く、地域、職域社会のあらゆる隙間から浸透し、しかも同じ理念の下に融合、協力して『白鳥芦花に入る』如く(下村湖人著『煙仲間』第三部)社会全部の在り方を変えようとするものです。

### 第二 芳流文庫

人間は社会的存在であると共に歴史的存在です。それ故に隣人とわが子孫に光と希望とを与えてその可能性をフルに發揮せしめる事が神の思召しに叶い、歴史の要請に副う所以だと信

じ、数年前から離れの一室に子供用の読み物を集めて公開しておりますが、三人（男子）の先生と一人のお母さんが、無償で子供達の読書、思索、勤労の指導をして下さっております。五十年後、百年後にこれが芳流学園に発展する事が私の夢であり、切なる願いであります。

## アジアの灯台

塚本 弘

私が始めてお目に掛ったのは、昭和二十七年の世界大会が終った直後の日曜日でした。

マキノ島のライラックの花もすっかり咲き散って、すがすがしい緑の光りが窓一杯に広がった御室でした。博士は、その年の初め大病をされ身体が不自由で椅子に座して居られましたが、私達の一行が室に入ると心から迎入れて下さいました。博士は「日本はアジアの燈台だ」と此の大会で話されて居られましたので、「東の燈台が来た」と云って、一人一人に頭深くさげて、日本式にご挨拶をされました。日本人の一行には故渋沢敬三氏や加藤勘十、シヅエ先生も居られました。加藤シヅエ先生は、前年の大会に出席されて、心に希望の灯を燈され、まったく別人の様な生々とした顔をして帰国されました。その折御主人の勘十先生は羽田空港に迎えにこられシヅエ先生の姿がまったく別人と思われたとの事でした。御二人は日本と世界に対して新しい将来の力を求められました。勘十先生は前年のメーデーに流血の惨事をひきおこしたこと



に対して、今回のメーデーには、憎しみの闘争でなく、社会の融和を造る大会にすると言われて、政界、財界、労働界にあらゆる働きをかけ、まったく静かなメーデーがくり上げられました。博士は此の話しを伺いながら「今朝、神に三つの言葉を話しかけられた。何んだらうか」と私に尋ねられました。私も困惑した状態でしたら、博士は「リーダーシップ・マスト・チェンジ」（指導者は変る）と言われ「貴殿方の御話の様に貴殿達は多くの指導者であつて、正しいイデオロギーを伝えることです。神は指導者を変えらる。そして此の世界を再造しうるのだ」と言われました。

私がこの運動に接してから、多くの指導者が国と国、政治と社会、経営者と労働者、農村、青年、家庭に数知れない奇蹟を造られたのを見せて頂きました。

博士に最後にお目に掛つたのは昭和三十七年だったか、日本の青年が新しい日本、アジアへの希望を持ち帰つた時でした。私は日本の青年達に欧州、アメリカの青年達が一緒に加つてくれればと思ひ、数人つれて帰りたいとお願ひに伺いました。博士は丁度その時アフリカに対しての決意に深く心を痛めて居られた時でした。心より聞いて下さり「日本はこれからが大変な戦いだ。他にたよるのではなく、正しいイデオロギーを造ることが必要だ、もつともつとアジアの国々に目を聞くことだ。こんどだけだよ、連れていきなさい。」と言つて下さいました。感謝

とお別れを言つて帰国したのです。その後、博士はドイツの思い出の地で深い眠りに入られました。此の時、私は博士の亡き後もこの思想は永久に消えることはなく伝われることを願つて参りました。

今日の世界で博士が残された四絶対は、あらゆることで必要とされて居ります。「四つの絶対」己れを改めるだけでなく、その力で新しい道を造り「何が正しいか」の思想で世界再造に邁進する事だと思ひます。

## 私とMRA

尾 関 雅 則

私がMRAという言葉を始めに耳にしたのは、十河さんが国鉄の総裁になられたのこのことであります。当時、国鉄本社の一課長補佐にすぎなかつた私は、それが「モラル・リ・アー・マメント」の略称で、「道德再武装」と訳されておるといふことぐらいいしか知りませんでした。

あれから、約二十年の歳月が流れ、わが国はすばらしい経済的な成長を果し、わが国鉄は世界に冠たる新幹線を成功させました。

そのような物質的な高度成長路線の絶頂を象徴するものが、今から思えば昭和四十五年、大阪の北東「千里ヶ丘」にくり広げられた「万国博」であつたと思われまふ。

しかし、皮肉なことに、大部分の日本人が道長の気持ちで「望月の欠けたることもなしと思えば」と、高度成長を謳歌しておつた同じ年の春には「公害」といふ言葉が、はじめて新聞紙

上に姿を現わしたのであります。

それからあとは、いわゆる激動の七〇年代という言葉によって表現されるように不安と混迷の時代となりました。「もの」さえ充足されれば他のことは何とかなると考え、終戦後まっしぐらに「もの」の生産拡大に、命をかけてきた日本人も、オイル危機を契機に、わが経済の底の浅さを感じるとともに、何か、大切なものを落してきてしまったのではなからうかということを感じようになりました。

そんなとき、私の心の動きをとらえたのが、MRAでした。「もの」でないもの、それは、「こころ」しかないわけです。「もの」と「こころ」の調和こそ、次の時代が求めるべき目標ではなからうか、こんな気持ちがいづのまにか私の心の中で、醸成されつつあったのでしょうか。三年前、国際MRA日本協会が発足するにあたって、榊さんの「おさそい」に、一も二もなく従って入会したわけであります。

最初は、なかなかなじめないこともありましたが、今ではほんとうによかったと思ひ感謝しております。特に、古くからMRAで活動されておられる多くの欧米の方々と接する機会を持てたことは、私のMRAに対する信頼感を大いに深めてくれました。

そして、今からは日本人が、彼等に何を与えるかを真剣にとりあげる時代になったと痛感しております。

## 平和をつくる人々

高 須 梅之助

富士の五合目には猛烈な強風が吹いていた。然し眼下にはいくつも立ち並ぶ雲の柱がのぞまれ、はるか彼方には紺青の海が限りなくひろがり、絶景とでもいうべきすばらしい景観であった。今もその時の有様が眼底にあざやかによみがえってくる。小田原の山の宿舎ですごしたMRAのすばらしい思い出と共に： テレビ人間とか、情報人間とかいう言葉があるが、現代人は日々、自分をとりまく情報の洪水に押し流れたり、次々とうつり変る情報に接していないと情緒不安定になる程の情報中毒にかかっている。虚々実々の情報の中で自己を、人間性を喪失してしまっているといっても過言ではなからう、そうした目まぐるしい俗界をはなれて清涼な空気と山気を十分に吸い、静かに深く自分を見つめ、一人の人間として自分の存在する世界について考え、人間の尊厳と平和の尊さを教えられたMRAゼミの三日間はともすれば見失い勝ちな自分の主体性を取り戻し、人間性を回復した本当に精神的に豊かな糧にめぐまれた三日間で

あった、ブックマン博士は「自分が変らないでどうして他人を変える事が出来ようか、M R Aの平和革命はまず一人一人が自らを変える事によって始まる」と説かれているが、私は今、このブックマン博士の教えはマタイ伝七章でイエスが「何故兄弟の目にあるちりを見乍ら、自分の目にある梁を認めないのか。自分の目に梁があるのにどうして兄弟に向つてあなたの目からちりをとらせて下さいと言うのか、まず自分の目から梁をとりのけるのがよい、そうすればはつきり見える様になる」という言葉に一致する。バイブルをひらきこの一節をよみ乍ら私の心にあの時に教えてもらったブックマン博士と教えのものの意味がより一層深く理解出来た気がした、又その折に『ブラウン氏丘を下る』という現代にキリストが復活してあらわれる映画をみせて頂いたが、現代人のもの偽善性が鋭く諷刺されており、パリサイ人的性格を私達が多分にもっている事を暗示していて深い感動と反省をおぼえた。その後バチカン放送でクリスマスマスに町に下りたイエスがイエス不在のクリスマスマスの人々が祝っているのを見て歩く話を聞いたが、現代の私達はこれを笑う事が出来ない程神からはなれてしまったのではないかと愕然とした。イエスは「私がこの世に来たのは見えない人達が見えるようになり、見える人たちが見えない様になるためである……もしあなた方が盲人であつたなら罪はなかつたであらう、然し今あなたが見える」と言い張る所に貴方がたの罪がある」と説かれたが、私達は利己主義で盲目に

なっている事に気がつかず、自分は正しく、相手こそ間違っているというエゴにとりつかれて常に争いの種をつくり出し出していると思う。神様は人間がまずよく聞くために耳は二つ、口は一つだけ与えて下さったといわれるが、常に自分の言行を謙虚に反省し、まず相手の主張をよく聞き、理解してから話し合うならばこの世に争いはなくなつてゆくにちがいない。

またM R Aでは絶対正直、絶対純潔、絶対無私、絶対愛を道徳再武装にあたつての基準としているが、私達は常に世間は妥協と要領で渡る所と考えてしまい勝である。それはアルコール中毒者の第一歩が「この位ならば」「この位までは……」と酒の深味に溺れた所から始まると同じで、他人に対してよりも自分で自分に妥協し、要領よくしてゆく事は精神的中毒に至る道なのだとしみじみ思った。パイブルは「神を恐れる事を知るのは知識のはじめである」と説いているが、私達の一挙手一投足を余人は知らず、全智全能の神は余す所なく見ておられる。自分をごまかす事は出来ても神の目をのがれる事は出来ない、この自覚をもつ事がM R Aの道徳再武装の第一歩だと私は思っている。こうした考えにもとずいて自分を変えてゆく事が大きくは世界平和へのつながりではないかと考えるがどうだろうか。有名な山上の重訓でイエスは  
平平をつくりだす人々はさいわいである 彼等は神の子とよばれるであろう

といわれているが、MRA運動に生涯をかけて挺身する気高い人々にふさわしい言葉であると私はいつも感ずる。



## 偉人の言葉

西 沢 与志雄

昭和二十六年夏、大阪市警視庁に勤めていた私は、連合国軍総司令部（GHQ）から、都市警察の人事管理を研究するため、三カ月のアメリカ滞在を命じられ、ワシントンを振り出しにサンフランシスコまで視察旅行をしたのだが、八月下旬ロサンゼルスへ行ったとき、ついでにMRA本部を訪問した。

大阪の警視總監鈴木栄二氏は、かねがねMRAに力を入れていられたので、私は研究スケジュールの寸暇を利用してMRA本部へ表敬に立寄ったのである。

鈴木總監の部下が来たというのでブックマン博士は大変喜ばれ、ハーカー氏、トイチエール氏、キャンベル氏、相馬ご夫妻などMRA幹部の皆さんと共に、私の歓迎晩さん会を催して下さいました。そのとき博士が述べられた言葉の中に、今に忘れることのできないものが二つある。

一、博士が「私達の国が、世界人類の経験したことのない原子爆弾を二度にわたりあなたの

国へ投下し、多数の人命を奪ったことは、なんとお詫びしても言い足りないが、どうか許していただきたい」と穏和かつ篤実な面持で言われた。

実は、私は七月一日から視察に踏み出し、約二か月各地を訪れて来たのだったが、十年前の十二月八日、宣戦布告をせずに、ハワイ真珠湾を急襲し、米國太平洋艦隊に大打撃を与えた日本に対し、「真珠湾を忘れるな」と、多くの米國人が深い恨みを抱いていることを知るに至った。それ故、旬日に迫った日米講和条約の締結に、自國政府をべんたつしようとする米國タカ派の動きが定めし激しいものがあるだろう思えるこの時、ブツクマン博士のこの広大無辺な心情の吐露は私の胸を烈しく波立たせた。そして、國際法の許さないやみ討を敢行した自國軍のことが恥かしく思えてならなかった。

二、更に博士は「日本は古い歴史を持つ大國である。それにくらべアメリカは建國日浅く、言わば幼児である。経験豊かな大人の日本から、ぜひ、いろいろと教えてもらわねばならない」と、実に謙虚な口調で言われた。

ブツクマン博士のことは、鈴木総監から、しばしば承っており、MRA書籍も、いくつか拝見していたが、その博士にお目にかかったのは、このとき唯の一度である。そしてその時、夢想もしていなかった高遠謙虚なお言葉に接して、まことに大きな感激を覚えた次第である。

(大阪府警察学校講師)

## 希望と勇氣に満たされる

住友美子

MRAは私にとって日常生活そのものとなり改めて書く事は何も無いように思います。

私の強い私に、日々新しく生まれ変われることを教えられ、平凡な主婦の私に人生の深さ、豊かさ、輝やかしい光に満ちた希望と真理を教えられたのも、世界に対して目を開かれたのも、すべてMRAを通してであったことは感謝にたえません。

フランク・ブックマンの唯一の思い出は或る午後、何應欽將軍始め中国（台湾）の方に数名、日本の方数名と共にお茶に招かれた時の事でございます。フランクは最初に、スイス系の人間としてスイスが中共を始めに承認した国であることを謝罪され、次にスイスの銀行が中共の資金を預かりそれが中共を動かしていることを謝罪され、更に若い時にはよく中国に行ったものだが最近は何を取って訪ねられず、中国を助けられなかったのはすべて私の至らなさであり、責任であり、申訳ないと謝まられました。常時毎年マキノに、コーに、中国（台湾）からは百

余名の青年を招かれ、訓練されたにも拘らず、余り効果も上つてはいないように見えました、一言も責められず、ただ謝まれた謙虚と無私の姿に心を打たれました。

そして中国の方々の言分を黙つて終るまで聞かれた後に間髪を入れず、中国の国と彼等自身の持つてゐる世界に対する使命を、心をこめて話されました。大きな視野、その人が必らず果たせると信じて心をこめて話される愛情と情熱に傍の私までゆり動かされました。「人を愛する」ということがこういうことかと教えられました。一九六〇年九月二〇日スイスのコーで中国の方々が帰国される前日でございました。

日本が世界に果たすべき責任を果たすべき責任を果たしてはいない今日も、M R A を通して日本に寄せられる海外諸国の方々の愛情はますます深く、神の計画の下に漸く日本も羽ばたこうとする輝やかしい将来を思い、今程希望と勇氣に満たされる日はございませぬ。これからも神の愛を妨げぬよう空になる祈りを忘れず、一人一人を大切に、一瞬一瞬を大切にしたいと思ひます。これだけが子や孫に伝え得る唯一の遺産であり、悪に対する善の答であり、将来への希望であると信じております。

## 迷中の是非

西川 四郎（指路）

九月七日の代々木のMRAの常任理事会の席上、相馬先生に勧められて、村雲瑞龍寺門跡、小笠原日英さんの常行慈悲「捉われる心からの脱出」という随筆集を手に入れた。

随所に著者の独自の生き方、考え方が見られて、瑞雲たなびく思いがし、この夏の暑さが吹き飛ぶ思いであった。

その中の一節に「迷中の是非は是非ともに非なり」という仏教のことが引用されているが、我々凡人は常に迷いの中に在り、その中で是非の判断を下しているのであるが、その是非はすべて非なりとすればどうしようもない人間の悲哀がつきまといつていくことになる。最近盛んに有事立法とか言われて、敵に襲われたとき、日本はどうしたらよいのか、ということが、仮想敵国の名まであげて論じられている。

私は昭和八年の生まれであるが、昭和初頭の頃の対露戦法という陸年の仮想敵国ソ連に対す

る前近代的なまるく前進という兵法を思い出さずにはいられない。

それらの是々非々の論議は、政治家を始め実業家、文化人のすべてを含めて迷中の是非のよ  
うに思われてならない。

迷中であつて澄んだ判断、これが大變為政者及び各界の指導者の中に少なくなつたような気が  
する。

何もかも分かつたような顔をして引つ張つて行かれてもこれまた困つたものである。「黙つ  
て座ればピタリと当たる」と神の如きご詫宣も又危険なものである。

凡夫である人間のすること、五里霧中の中にあつて、ああでもない、こうでもない  
と暗中模索して生きていくのが人間なのだとすればこれも又是とすべきであろう。

迷中の是非なれど、とらわれざる一心をもつて明鏡止水、是なりと判質して生きていくべき  
であろう。

釈尊にしる「濟渡し難き衆生」と嘆かれたこともある。

「墓のしょう（土べい）は彫り難し」とためいきをもらした孔子の嘆きもまた是非の判断の  
至難さを物語るものではなからうか。

私共は毎日なまぐさい泥々の世の中に生きて、様々な事件に会い、傷つき相克する人間模様

に接触しているのだが、全世界の全てが迷いの中にあり、雲去りて天一色と何一つカラツとした解決がなされていない。

人間には明日の命の確約がない。かてて加えてあらゆる欲望がある。おまけに目先の現象、あるいは勝手なのだが、事実と想像される現象の結果、必ずしも自分の願望通りに達せられる確信が持てない不安が増大している。

欲に走るエコノミツ・アニマルは利益を求めて東奔西走し、政治家は票を求めて狂奔している。

すべてが迷中の上に低迷している。これが人間の生活の実態であろう。苦悩の中に日々生きる続ける人間であるだけに、せめて人間の一人一人が、生活の中でこれと想つたことを感じたことはみんなに披露して欲しいものである。

今は亡きブックマン博士との出会い、これは大変な機会を持たれた人達である。是非博士との生な出会いの印象を尽きることなくお伝え願いたいものである。今や私共は彼の著書でしか、人との話でしか出会うことはできない。

「ブックマンとの出会い」どうも「ブックマン博士との出会い」と言わないと何か少しばかり失礼に当たる感じがするが、これはブックマン博士が、日本人に孔子や釈迦、キリストほど

なじみがない証拠なのではなからうか。と同時にブックマンが我々と同時代の人間であることの証左でもある。

私はブックマンを傑出した史上の偉人と認め、敢て呼び捨てにすることにした。もうそうしてもいい時期だと思う。世界の聖職の座に加えていい価値のある人と判断する。

私共は幸いにも国内のM R A関係の皆さんだけでなく全世界のM R Aの皆さんからブックマンについて色々お話しをうかがったり著書などに接触しているうちに、この人の意見は正しく国際的であり、これから廿一世紀にかけてブックマンの思想と実践は一大飛躍の過渡期にある日本にとって誠に大切なことを知らねばならない。

私共の日常生活ではなかなか世界の偉い方々との出会いはそうそうは実現できないものであるが、日常茶飯事の中におけるM R Aの皆様との出会いこそ大事にしなければならぬと思う。道義にしろ思想にしろ、生活の上に立って実践してこそ真の意義があるものである。

全ての運動の心というものは、齒に衣を着せず論議され、虚心担懐、被襟一笑のうちの出会いの回数が多いほど心から心へ浸透して行くものであり、豊かな仲間としての感懐がみなぎっていくものであると思う。

ブックマンに実際にお会いになった方は生な会見、出会いの印象を卒直に何回でもあらゆる



席上でお話しして欲しいものである。自分の眼で見た印象、これはこの世で貴重なものである。それだけに出し借しみすることなく、お伝え願いたいものである。例えば昔の聖賢偉賢の実際活動の映画でもあったら我々の見解はもっと深いものになっていくのであろう。孔子の門弟七十二名の共同実践記録である論語も当時としては弟子七十二名の儒教的ジャーナリストが全国を行脚して説得して回ったからあれだけ、儒教精神があまねく行きわたったとも言えよう。聖書もまたキリストだけでなく、多くの使徒達の伝道によるものであることは明らかである。

ブックマンの実言行録はもっともつと経験ある諸先輩と皆さんの披露があつてしかるべきである。

これからの青少年達にとってはこれ位如実な印象はないものである。

これがブックマンの片言隻句であろうとも教える人の人柄が、M R Aのエスプリが高度にまで晶華されて包含されているのではなからうか。

## 思想のいのち

山崎房一

忘れもしない帝国ホテルのホールであった。「ヨリは内なる心の声に聴き従って、人々や世界のために一生を捧げたのです」と、ブックマン博士は戦後の混乱期に精神的基盤の確立のために活躍し、その短い生涯を閉じたある日本青年と、その御家族について語られた。

堅苦しくなくユーモアをまじえ、温かく包みこまれるような博士の言葉に、若くて不安な私の心はやすらぎと大きなよろこびに満たされたのだった。

温かさといえば、イソップ物語に「北風と太陽」という話がある。ポカポカとした五月のあの陽光の温かさこそ、ブックマン博士の思想、即ち、MRA精神のいのちにちがいないと、MRAを知って三十年余りを経た今日でも私はそれを固く信じている。なぜなら、人の心は吹きすさぶ北風では絶対に変えられないし、たとえ変わったとしても憎しみが心に残ってしまうということを私は幾度も経験している。

お互がその陽光のような温かい気持になれば必ずこの世の中に実現し得るのだという素晴らしい世界の小さなモデルがスイスのコーやインドのパンチガニーであろう。今は亡き奈良の薬師寺管長橋本凝胤先生がM R A世界大会に出席されて「ここに世界の極楽浄土が実現している。混乱している世界各地を訪れたが、ここで初めて大きな希望を得ることができた」と言われたことを同席していた私はよく覚えている。

なぜ私はM R A精神が必要だと思っているのだろうか。

或る人が「お互がよく知りあえば、ケンカも戦争も無くなる」と私に言ったことがあった。人間社会はそんな単純なものではなく、むしろその逆ではないか、とその時、疑問を持った。というのは、知る権利を持ち利害立場がそれぞれ違う人間は、お互を深く知れば知るほど失望し、悲劇が増大するということを、この頃の世相は私達に教えているように思われる。それは人間の業かもしれない。

私には七人の兄弟妹がある。小さい頃はよくケンカをした。幸にして今はわ周防の田舎や徳山、京都に住んでいるので、久し振りに会うと、とても仲がいい。このお互をよく知りすぎている兄弟姉妹七組の夫婦が子供の頃のように、もし一軒の家に一緒に住んだとしたら一体どうなるだろう。考えただけでもぞつーとする。その、ぞつーとするような「知る、知らされると

いう顔をつきあわせた小さい小さい社会」へと現実に私達の住む社会は激変しているように思えてならない。このなかで生きのびていくのは大変なことだ。これをよく表わしているのが選挙である。同じ選挙区では政党間の争いよりもお互の事情をよく知っている自党内の候補者同士争いのほうがはるかに深刻であると聞いている。

政界に限らず事業でも、他社の情報を得ればむりをしてでも事業を拡大する。その結果として大きな銀行ローンを背負ってしまう。毎月多額の返済に追われて、休むひまもなくあくせく働いているのが私の姿だ。連日の忙しさで疲れはてて、「ありがとう」「どうぞお先へ」「すみません」「良かったね」といったやさしい言葉やいたわりの言葉がどこかへ蒸発して、トゲトゲしい言葉にまわりの人は傷ついてしまう。だから、まわりはみんな目がつり上って怒りばく、遂には黙りこんでしまう。気が付いてみると、油の切れた歯車がギシギシきしみながらやつと廻っているような家のなか。一歩家の外に出ると、ささいなことが原因で駅のプラットホームや街はずれで大人のつかみ合いのケンカをよく見かける。また、学校では強い者が集団で弱い者、しかも一人をみんなでいじめ始める事件がよく起きている。宗教界ですらすさまじい内紛があるようだ。増加する自殺、子殺し、蒸発、子供の非行、行きづり殺人など。残された家族はどうなっているのだろうか。「まさか、あの人が―」、信じられないようなことが起つてい

る。まさにこの世の生き地獄のような悲惨な連日の新聞記事で、そつと我が身を慰めているようではとても解決にならない。新聞に載らないで闇に葬られた事件はどんなに多いことだろう。冷静な心をと戻してよく見ると、家庭や社会の歯車はもうすつかり錆ついているが、それでもみんな何とかしなければと心の底では思っている。

この際、誰でもよいから先づ気が付いた者から、ちよつと勇気を出して錆ついた歯車に温かいのちの油を根気よくさし始めたらどうだろう。笑顔ややさしい言葉が帰ってきて、すべてがスムーズに動き始め、お互の間もまるで変ってくるにちがいない。

三人のコウエル兄弟達の「すみません、私が悪かった」というひと言は心を結ぶ魔法の言葉」というコーラスが聞こえてくるような気がする。

私の人生をすつかり変えてしまったブックマン博士の思想、MRAのいのちを二人の息子達もきつと受け継いでくれるものと信じている。そうすれば、厳しい現実の社会にあって、彼らは迷うことも悩むこともなく、ヨリさんのように世間に役立つ人間として大きく育つことを父親の私はよく知っている。

## フランク・ブックマンの思い出

鶴田重蔵

私がフランク・ブックマン博士に始めてお会いしたのは、今を去ること二十七年前の昭和二十六年六月四日であった。日本MRA使節団五十名の中の一人として、米国ミシガン州マキノ島に於て開かれたMRA世界大会に出席したその日であった。

私は当時日本電信電話公社の職員訓練課長をしていたが、終戦後の混とん時代に於ける人間訓練にMRAのような道義精神は大いに必要ということで、当時日本国有鉄道の職員局長をしていた片岡義信氏、国警本部の課長をしていた木村行蔵氏等と共に参加したのであった。昭和二十四年、二十五年にも日本からは大型代表団がMRA世界大会に参加しており、その人々からMRAの何たるかは聞いており、その趣旨には共鳴していたのであるが、その創始者ブックマン博士の温容に接して生きたMRAを見る気持であった。ほんとうに自分を捨て切って世界再造の気概に満ちた人という感じであった。

その高弟ピーター・ハーワードが「思想は脚を持っている」という名著を出しているが、全くその通りで、ブックマンの思想は今日世界各国に行き亘り、彼を知る一人ひとりの胸の中に脈々と生き続けていると思うのである。MRAは吾が人生行路の灯台であり、私は今後ともこの思想を導きとして、正しい、本当の生き方を求め続け、生き続け、喜びに満ちた真の世界の実現に邁進したいものと思う。

¥100

発行所

(〒151) 東京都渋谷区代々木1-57-2

ドルミ代々木 308

国際MRA日本協会

電話 03-374-7600番





